

マタイ12章31-32節 「赦されない罪」

1A 引き渡される神

1B 悩ませる御霊の働き

2B 祈りを聞かれない方

2A どんな罪でも赦される方

1B 姦淫

2B 殺人

3A 御霊が正される過ち

1B イエスを信じないという罪

1C 御霊による証し

2C 信じるという義

2B 信じられなくなる心

1C パリサイ人の継続的拒絶

2C 霊的委縮

本文

マタイによる福音書 12 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 11 章まで来ましたが、今日、午後礼拝で 12 章を一節ずつ学びます。今朝は 31-32 節に注目します。「**31 ですから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけますが、御霊に対する冒瀆は赦されません。32 また、人の子に逆らうことばを口にする者でも赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、この世でも次に来る世でも赦されません。**」

この言葉は、イエス様が、悪霊によって目も見えず、口も利けない人から悪霊を追い出した後に言われた言葉です。パリサイ人が、このことを悪霊どものかしらベルゼベルによって追い出しているのだとしたのですが、イエス様はこの言葉に対して強く反応し、31 節、32 節の言葉を言われています。聖霊によって悪霊を追い出しているのに、それを悪霊どものかしらとって冒瀆したのであれば、それは赦されない罪であるということです。

1A 引き渡される神

1B 悩ませる御霊の働き

聖書には、恐ろしく聞こえるいくつかの御言葉があります。恐ろしく聞こえるので、サタンもしばしばクリスチャンに対して利用します。その一つが、ここのイエス様の言葉です。自分が赦されない罪を犯してしまったのではないかと悩み、良心の呵責が大きくなり苦しみます。もう自分は罪を犯してしまったから、神から赦されないのではないかと悩んでいるのであれば、はっきりと、確信

をもってお伝えします。その悩みそのものが、赦されない罪は犯していない証拠です。聖霊が、自分に良心に対して罪を犯したことの痛みを与えられており、また、自分がまだ罪に打ち勝てていないことを教えてくださっているであり、聖霊が自分の内に住んでおられることの証明なのです。

ヨハネは、第一の手紙でこのことを「心の責め」として語っています。「3:19-21 そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。たとえ自分の心が責めたとしても、心安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」主の御心を行なえば、神の前で心安らかにされます。神の前で確信を持つことができます。けれども、心が責められていたとしても、心安らかでいられるというのです。そう、その心責められるということは、つまり自分の内に聖霊がおられて、御心を行なっていないことについての悲しみを与えておられるからです。自分の心がどんなに責められようとも、神に見捨てられていないという安心があるということです。

2B 祈りを聞かれない方

それでも、聖書には、イエス様がここで赦されない罪と言われているように、神がお見捨てになる行為が書かれています。ユダの国が偶像礼拝などの背信行為によって、どんなに悔い改めるように言われても、全く悔い改めていない民について、エレミヤが執り成しの祈りを捧げました。ところが、神はこう言われました。「あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり、祈りをささげたりしてはならない。彼らがわざわざいであって、わたしを呼び求めても、わたしは聞かないからだ。(11:14)」そして神は、ホセアを通して、背信の罪を犯している北イスラエルの民について、「エフライムは偶像にくみしている。そのなすに任せるがよい。(4:17)」と言われました。さらに、ローマ 1 章には、「そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。(1:24)」とあります。

これは、実に恐ろしいことです。その人が何か試練が来て、惨めな状態になるほうが、我に帰って悔い改めることができるのに、それも行なわず、あまりにも心が頑なってしまっています。それで、神はそのままにせざるを得なくなっている、という状態であります。

2A どんな罪でも赦される方

イエス様がここで語られたことで、見失いがちなのはとてつもない憐れみと恵みの約束をイエス様が語られていることです。「人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます」とあります。そしてさらに、「人の子に逆らうことばを口にする者でも赦されます」とまで言われます。神が赦される罪で、赦すことのできない罪はない、ということです。皆さんは、このことを信じておられるでしょうか？ここを、私たちがしっかりと踏まないと、キリストの愛の深さ、高さ、長さ、広さを知ることはできません。

何年前か、あるニュースを見て、あまりにも衝撃的でした。ある教会の牧師が、教会に通っている女性と不倫関係になりました。それだけであれば、残念ではありますがしばしば聞く話です。しかし、その女性と共に彼女の夫を殺したというのです。¹私は、かなりショックを受けました。けれども、聖書にはその事件が書かれているのです。そう、ダビデです。ダビデは、神を愛する人でした。イスラエルの国は、神が祝福され、ダビデの家も栄えました。ところがある時に、夕暮れに屋上にいると、そこから女が月の汚れを洗っていました。そして情欲を抱き、使いを送って彼女を連れてこさせ、寝たのです。彼女はバテ・シェバ、自分の部下であるウリヤの妻でした。そして、彼女がダビデによって妊娠したというのです。それで、ダビデはウリヤが妻のところに行って寝るようにさせようと、戦闘中だったのにウリヤを連れて来て、家に戻るように促しましたが、ウリヤは非常に誠実で、有能な兵士です。家に帰らなかったのです。それで、ダビデはアンモン人との戦いの最前線に彼を連れて行かせるようにヨアブに伝え、それでアンモン人の手にウリヤが陥って、死にました。一人残されたバテ・シェバをダビデが引き取ったのです。

1B 姦淫

そしてダビデは、後にナタンによってその罪を指摘されました。貧しい人の子羊を奪って、金持ちの人がお客さんのもてなしをしたという例え話を聞いて、ダビデは、「そんなことをした男は死に値する。」と言いました。そしてナタンは、「あなたがその男です。」と言いました。「あなたはヒッタイト人ウリヤを剣で殺し、彼の妻を奪って自分の妻にした。(2サム 12:9)」そう言われたのです。そしてダビデは、「私は主の前に罪ある者です。」と言いました。するとナタンは、「主も、あなたの罪を取り去ってくださった。あなたは死なない。」と宣言したのです。

彼は罪赦されただけではありません。彼に対する神の約束は、世継ぎの子が永遠の神の国を治めるというものでしたが、マタイによる福音書1章 1 節には、「ダビデの子、アブラハムの子孫、イエス・キリストの系図」となっているのです。そう、彼はこれほど恐ろしい、ショッキングな罪を犯したのに、赦されただけでなく、キリストの先祖になるという恵みも受けていました。その他、聖書には姦淫の罪でいうならば、姦淫の現場で捕えられた女がいますね。イエス様はその女に、「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。(ヨハネ 8:11)」と言われました。

2B 殺人

そして、ダビデは殺人の罪も犯しましたが、同じように殺人の罪を犯した人としては、新約聖書ではパウロがいます。そうです、彼はユダヤ教のテロリストでした。ステパノがサンヘドリンで弁明し、それを聞いて腹が立ったユダヤ人たちが、石打ちで彼を殺しました。その時にパウロは、その殺害に同意していました。そして、キリスト者であると分かれば、暴力的に捕縛し、血を流すこともしたでしょう。そのパウロを神は捕え、捕えただけでなく、キリストの使徒にされたのです。パウロは

¹ https://www.huffingtonpost.com/2012/11/21/pastor-affair-murder_n_2171028.html

言いました。「私は以前には、神を冒瀆するもの、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。(2テモテ 1:14)」

ですから、どんな罪を犯したとしても、たとい人の子、キリストを冒瀆する罪を犯したとしても、その罪は赦されるのです。

3A 御霊が正される過ち

では、どんな罪が赦されないのか？イエス様は、「**聖霊に逆らうことを言う者**」とされています。神は、ご自分のことを知ってもらうために、御霊によってそのことを行なわれます。その働きを受け入れないで逆らうのであれば、赦されない罪を犯すということです。ノアの時代のことを考えてみましょう。主が言われました。「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。だから、人の齢は 120 歳にしよう。(創 6:3)」この「とどまる」ということばは、「奮闘する」というように言い換えることができます。つまり、主の霊が、人々が悪に傾く心に対して、「それは間違っているのだ」という声を聞かせるようにする。けれども、120 年経てば、それはなくなるというメッセージだったのです。ノアがこの間、義を宣べ伝えていたとペテロの手紙に書いてあるので、聖霊がノアの説教によって聖霊が彼らに働いておられたと考えられます。

1B イエスを信じないという罪

いつも主が、聖霊によって働きかけてくださり、人々の良心に訴えておられるということが分かります。イエス様は大胆にも、人の子を冒瀆する罪も赦される、つまりイエス様ご自身を冒瀆する罪も赦されると言われました。イエス様は、へりくだった方であられ、ご自身が中傷を受けても、それは赦されるのだとされています。けれども、イエス様が行なわれていたのは、御霊によって悪霊どもを追い出されていたことです。そして口もきけないようにされている人から、悪霊を追い出されました。目を開けられました。これは、神にしかできないこと、人にはできないこととされていて、キリストが来られた時に初めてそんなことができるようになっていました。それで、人々が「もしかすると、この人がダビデの子なのではないだろうか。(12:23)」と言ったのです。そうです、聖霊によらなければ、イエスが主であるということはず、聖霊が臨まれるからこそ、イエスが確かに自分を救う方、キリストだと知ることができるのです。キリストを知ることのできるのは、御霊の働きがあるからこそ、なのです。その証しを拒むのであれば、それは罪の赦しの備えそのものを拒むことになりまますから、罪が赦されないのです。

1C 御霊による証し

イエス様は、ご自分が天に昇られてから、もうひとりの助け主、聖霊を送られることを約束されました。「ヨハ 16:8-11 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにします。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。義については、わた

しが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」世についての誤りを明らかにするのが、聖霊の働きであると言われますが、その罪については、「彼らがわたしを信じないからです。」と言われました。嘘をついたであるとか、先ほどの姦淫や殺人のことではなく、イエス様に信頼を置かないことなのだという事です。そして、義についてということですが、それは私たちが正しいことをきちんと行なわなかったということではなく、「わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなる」ということです。これは、イエス様が天に昇られて、天の父に受け入れられたのと同じ義だということです。つまり、イエス様こそが神に受け入れられる義の基準だということです。この方こそが、神の正義であることを受け入れること。そして、裁きについても、自分が裁かれるかどうかではなく、悪世を支配する者、すなわち悪魔が裁かれたということです。これは、キリストの十字架によってあります。

ですから、聖霊によって何が証しされるかといいますと、自分の罪がキリストの十字架に置かれて、そのキリストに自分が信頼する。十字架の死によってあなたを滅ぼそうとしている悪魔が裁かれたのだ、ということです。

2C 信じるという義

だから、聖霊が証しされるのは、イエスのところに来て、この方に信頼して、罪を赦していただくのだということ。聖霊の証しを拒むとは、この罪の赦しの備えを拒むということであります。ヨハネ 3 章 17 節には、すばらしい証しが書かれています。「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」イエス様は、私たちが裁くために来られたのではありません。救うために来られたのです。しかし、救うために来られたのに、この方のところに行こうとしない時、既に裁かれているとヨハネは証言しています。「18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれています。神のひとり子の名を信じなかったからである。19 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」御子を信じることは、自分の心にある闇、罪が明らかにされることです。自分の罪を光のもとにさらけ出し、そして罪を赦していただくからこそ、キリストの流された血がその罪を清めます。ところが、ここに書いてあるように、自分の心にある闇を闇の中に隠したままにしようとするなら、その罪がそのまま留まっているということです。

黙示録 20 章には、最後の審判の幻があります。そこで何が問われるのでしょうか？いのちの書があり、行いの書もあります。いのちの書には、自分の名がそこに書き記されているかどうか、キリストが血を流されたことによって、命を得た書です。イエス様が、「この人は知っている」と言われれば、御父はその人を裁くことはなさいません。そして、そうでなければ、行いの書にしたがって裁かれます。つまり、イエス様を知っているかどうか？なのです。

2B 信じられなくなる心

1C パリサイ人の継続的拒絶

パリサイ人たちに対して、イエス様が「赦されない罪」について語られたのですが、そのことはヨハネ 12 章において、恐ろしいほどに分かり易く説明されています。「12:37 イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。」そう彼らは、いつまでも信じなかったのです。もう、信じない理由がなくなっているのに、それでも心を頑なにしていたのです。イエスがキリストだという、動かぬ証拠を目の前で見たにもかかわらず、イエスに信頼を寄せませんでした。そこで、39 節にはこう書いてあります。「イザヤはまた次のように言っているので、彼らは信じることができなかつたのである。」信じなかつたのではなく、信じるができなかつたとあります。パリサイ人たちは、初めは信じないで拒み続けたのですが、ついにその良心が麻痺して、あまりにも頑なになってしまつて、信じるができなほどになつたのです。これが最も恐ろしいこと、そして「赦されない罪」ということになります。

2C 靈的委縮

私たちの肉体には、「委縮」という現象があります。それは、体の筋肉や器官を使わないでいると、その機能が弱まって、ついに使えなくなることです。長期入院をして、例えば全く歩くことをしなかつたら、足が委縮して歩けなくなるでしょう。それと同じように、聖霊によってイエス様の働きかけを受けているのに、その度に「いいや、受け入れない」と拒んでいると、靈的な能力が落ちていきます。次に、「いい、受け入れない」と心の中で言うことが楽になります。そしてそれが自動的に、「いい、助け、救いは要らない」となつていきます。それで、もう聞こえなくなつてしまつています。イエス様の助け、救いを受け入れる力が委縮して、無くなつています。これが、「信じるができなかつた」という意味です。

今、心が痛んでいるでしょうか？良心が痛んでいるでしょうか？それは、聖霊が働いているからです。その時にそのまま応答する決断をしましょう。「主を求めよ。お会いできる間に。呼び求めよ。近くにおられるうちに。悪しき者は自分の罪を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。(イザヤ 55:6-7)」